

# 吉田山丘陵地における文化的領域の景観構成に関する研究

The Landscape Formation of Cultural Sites on the Yoshidayama Hillside

出村嘉史\*・川崎雅史\*\*

Yoshifumi DEMURA\*・Masashi KAWASAKI\*\*

## 1 研究の背景と目的

日本を代表する景勝地が集積する京都において、とりわけ魅力のある空間の多くは、都市周縁の山麓部にある。そこには多数の社寺仏閣を核として、京都のイメージを支える文化的な空間が形成されている。山田の研究<sup>1)</sup>によると、これらは都市と自然との境界部の起伏の豊かな地に、その両義性を読みとり最適な場所として占地した結果である。現在においてもこれらの領域は、都市に住む人が自然と交流し、固有な文化的行動を促す場所であると考えられる。

本研究の対象地とした京都吉田山は、東山連峰近くではあるが、京都市街地に孤立する小高い丘陵地である。ここには吉田神社を始めとする宗教文化的な領域が展開してきたが、近代に入って一部が数寄の空間として開発され、現在では大部分が都市公園になっている。この丘陵地上は、茶会や現代アート展など様々な文化活動の行われる界隈が成立している。しかし、それらは丘陵地形の景観特性に強く起因しているものと考えられる。そこで本研究は、このような吉田山全領域において、宗教的、文化的諸活動の施設要素を対象として、丘陵地の地形を基礎としたランドスケープの構成と配置を分析する。

吉田山(神楽岡)あるいは東山一帯を扱った研究には、都市とのつながりを探ろうとするものや、建築様式を見出そうとするものなど、多岐に渡る蓄積が見られる<sup>2)</sup>。しかし、山辺における具体的な文化活動の諸施設とランドスケープの関係に言及した研究は稀少である。本研究は、実測に基づく景観構成を図面化し、文化的諸空間とランドスケープの関係を解明しようとする点に新規性がある。

**Key Words** : 景観、空間設計、公園・緑地

\* 学生員 京都大学大学院工学研究科 修士課程

(〒606-8501 京都市左京区吉田本町 Tel 075-753-5123)

\*\* 正員 博士(工) 京都大学大学院工学研究科 助教授

## 2 都市の中における吉田山の位置付け

吉田山は京都東山の一つに数えられるが、実際は孤立丘であり、周囲を平地に囲まれ(図1)平安京へ向かって東山より一歩手前に独立して存在する。歴史とともにこの周辺には社寺集落や都市が形成されてきた。

この丘陵地は、古代に吉田神社が築かれ、さらに齋場所が設けられると、宗教的に強大な地位を獲得した<sup>3)</sup>。同時に名所地としても認識されるようになり、近世にはしだいに庶民の屋外の遊び場となった(図2)<sup>4)</sup>。

近代に市域が拡大すると、吉田山は市内へと含まれて、吉田村が文教地区として都市化の先駆けとなった。この時、山荘などの数寄空間や住宅地として、主に東山と向かい合う吉田山東斜面が開発された。

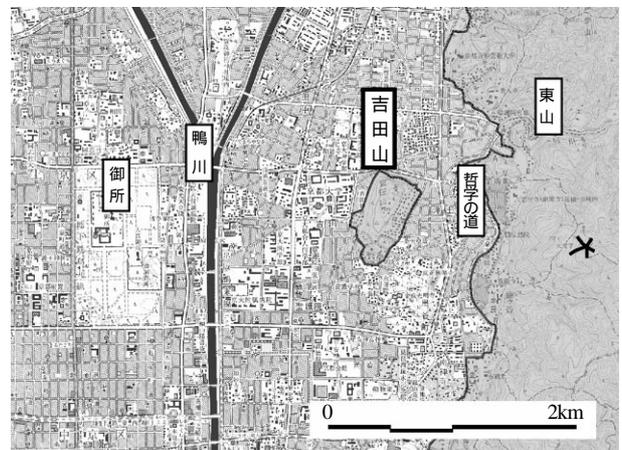


図1 京都市街の中の吉田山



図2 近世の吉田山遊宴(都林泉名勝図会)

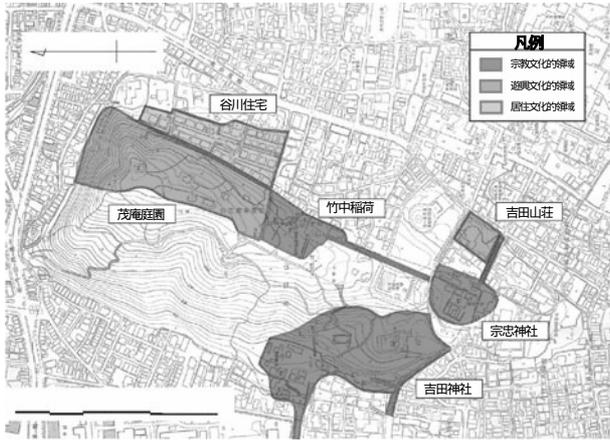


図3 吉田山の文化領域分布

現在は都市の中に残された緑地として重要な存在となり、数寄の空間が一般に開かれ、茶会を始め、現代的芸術活動などをも見るようになった。

このような歴史的背景から、吉田山内部は概ね次の3種類の文化的領域で形成される。すなわち一つは吉田山の中で最も歴史の古い吉田神社を中心とした宗教文化的領域、一つは近代において施主の豊かな財力を背景に発達した数寄の空間としての遊興文化的領域、そしてもう一つは近代以降に都市の拡大とともに形成された居住文化的領域である（図3）。

### 3. 宗教文化的領域の景観構成

吉田山における宗教文化的領域は、吉田神社（創建859年）境内と、その摂社末社の境内、そして宗忠神社（創建1866年）で構成される。これらは祭事を中心とした人々の集う場所であり、これら宗教的な空間を形成する幾つかの基本的な構成が存在する。すなわち、小さな丘陵地内における敷地構成法として、平場の連続を山の上方へ直線的に配置せず、横へ広がる折線

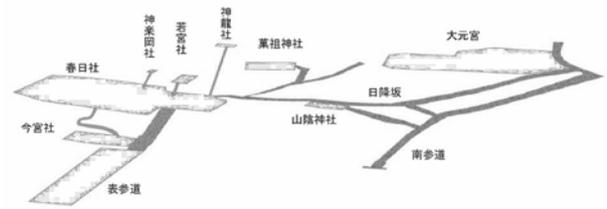


図4 吉田神社境内の平場と参道の構成



図5 吉田神社節分祭、追儺式

的な配置（図4）を選択し、常にさらに高いところから覆いかぶさる地形と樹木によって境内に深みを演出している。また、境内を囲む地形や樹木を利用して独自の宗教観念の世界で包む立体的構成がなされ、参道は平場を繋ぐ、あるいはそれらへ至る為のモード変換装置となり、設定した聖地への奥行きを演出している。

全体的は明治期の社地縮小によって、それまでの絵図などにより知られる吉田神社と比べて空間の多様性を欠いた。しかしこれらの敷地構成により、全国に知られる節分祭などの祭事において、非日常的な空間を演出する舞台となる柔軟性を備えている（図5）。

### 4. 遊興文化的領域の景観構成

東斜面の上部、すなわち稜線から東中腹にかけて広がる庭園は、大正末から昭和の初めにかけて、運輸業

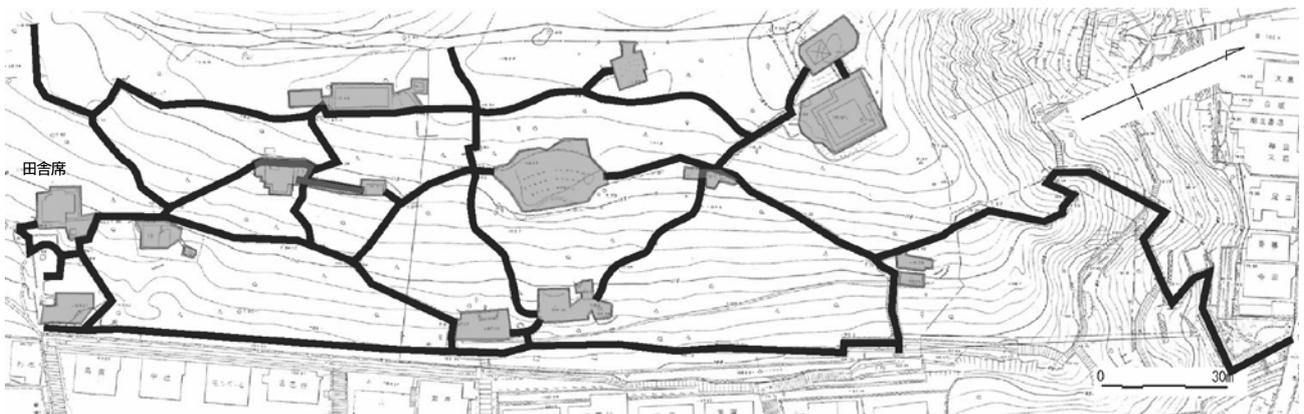


図6 茂庵庭園の苑路と平場

で財をなし裏千家老分であった谷川茂次郎氏（雅号が茂庵）によって造営された広大な茶の湯の空間であった。昭和の初期には定期的に大規模な茶会が催された<sup>5</sup>。この茂庵庭園は茶室のある幾つかの平場と、斜面を意図的に昇り降りする苑路で構成されて（図6）、茶室などの建築や苑路の配置や向きにより、これらを含む周辺の景観と主要な視点場が、広い庭園の中で特定の場所に決定される。これらの景観は、石垣と植栽、建築によって近景がつくられ、その背後の遠景（眺望）とダイレクトに結びつく。近景では、特に斜面上に意図的な起伏を設け、3次元的に重なる層ができています。例えば、現在に残る茶席である田舎席周辺では、斜面を切り込んで石垣による3段の層を、茶室前の井戸を囲い込むように設け、さらに茶室から張り出す舞台によって、高低差の臨場感を演出している（図7）。

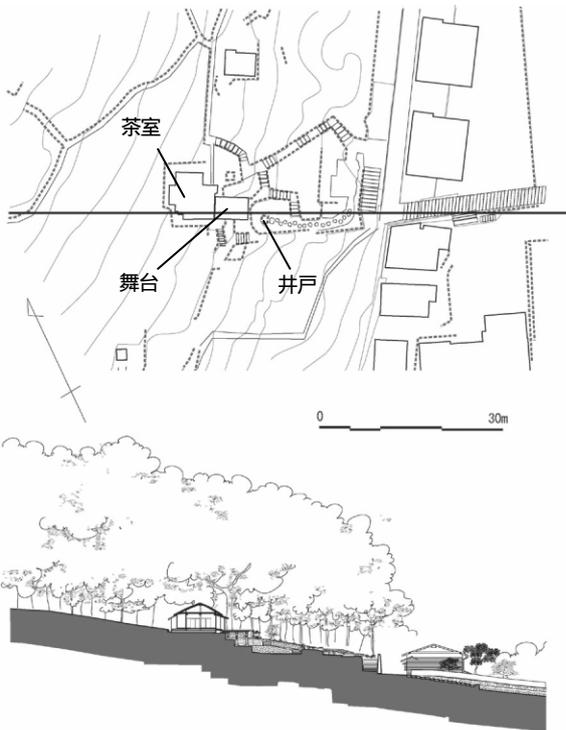


図7 田舎席周辺断面図

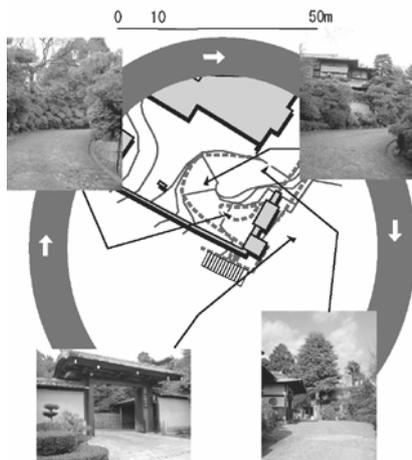


図8 吉田山荘のアプローチ

吉田山南東部の吉田山荘も、ほぼ同時期に建設された遊興文化を培う敷地と見ることができる。ここは、隣の丘陵地にある真如堂と向かい合う斜面に占地された東伏見宮別邸（1932年創建）であった。建築と向き合う庭園や、そこへ至るダイナミックなアプローチに特徴があり（図8）、内部では視線誘導によって広大な空間が演出されている。

これらの領域は、現在 Café や料亭、あるいは公園といったいわば公共的な空間の使い方をしながら、山荘や別邸としての私的な数寄空間として培われてきた、茶事をはじめ飲食あるいは芸術を伴う、景観を愉しむ為の行為に結びつく設えを多く持ち続けている。例えば茂庵庭園の一部は、茂庵という名の喫茶を中心にその庭園が開かれており、吉田山荘では見事に創られた敷地を活かして料理旅館の経営がされ、いずれもここへさらに文化を重ねようと、庭園を利用したコンサートや展覧会などがたびたび試みられている。

## 5. 居住文化的領域の景観構成

茂庵庭園から東に続く中腹斜面には、斜面上に段地を設けた構成で（図9下部）美しく整った家並みが存在する。ここは、東山、特に大文字と向かい合い、それに対する絶好のビューポイントであり（図10）、そもそもこの場所の価値を鑑みて、品格の高い街並を形成する意図があったに違いない。これらは先に紹介した谷川氏によって大正末から昭和の初めにかけて借家として開発されたものであり、以下谷川住宅と呼ぶ。先の茶室と同様に



図10 東斜面住宅敷地の景観

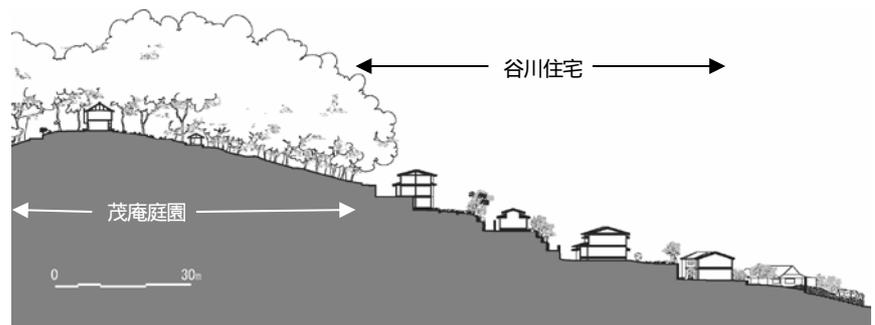


図9 吉田山東部東西断面図

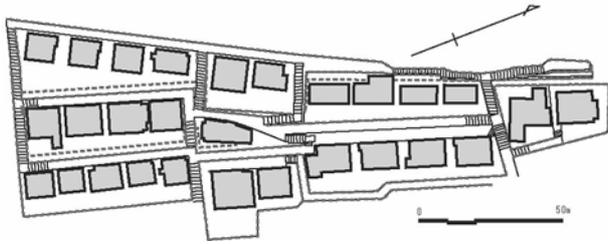


図 11 谷川住宅敷地の配置図

銅板葺の屋根で統一された木造の建築を始め、路地、階段など基本的な景観構成要素は極めて簡素で規則的な構成であるが、地形に沿わせた区画の並びは縦横にやや歪んでいる（図 11）。このずれによって上下、あるいは前後に極めて不規則な立体的関係が生じ、景観の多様性に繋がっている。これらの多様性は、秩序的にデザインされた中の細かな「破り」から生じている為、全体の景観には統一性が存在する。

これらの家並みは、建築の所有者を戸別に替えながら現在まで存続し、現在は数棟が新たな装いで立て替えられてはいるが、特に景観意識の高い住人によって、その生活美が守られ、培われている。

## 6. 包括的景観構成の分析

お互いに隣接する文化的領域については、各文化的領域相互の立体的なつながりを見るため、吉田山全体を斬る代表的な三断面をとり、実測した。例えば先の図 9 の断面において、隣り合う谷川住宅と茂庵庭園の関係では、茂庵庭園における視点場からは比較的近景にある森の葉の隙間から下に展開する集落の存在を垣間見ることができるが、谷川住宅における視点場からはこの緑の壁が重要な風景となっている。背景の豊かな森により、谷川住宅路地のテクスチャーが活かされ、木造銅板葺の建築群や、視界に入る各庭の植栽などが調和されているといえる。このような双方向で媒介となる樹木などの意味を読み替える「みる・みられる」の関係が各領域間に成立し、主に樹木を媒介に、地形による主体の立場の違いを利用して演出されていた事が確認できた。

また、吉田山全体はその地形故に景域の全体像を視覚的に把握することが困難であるが、丘陵地全体を巡る道（図 12）によって、それぞれの文化的要素が繋がっている。山腹を地形に沿って屈曲する道は、森に包



図 12 吉田山全域へ張り巡らされた道

まれて迷宮性を帯び、都市内にありながら深い森を思わせる演出効果が認められる。この山腹の道より西側の森はほぼ原生の森で視界を完全に遮るが、開明性、明瞭性の高い稜線上の道とこの山腹の道の間では、公園地の手入れされた林を通して互いに視覚的につながりながら山全体の主軸を形成し、それらはそれぞれ隣接する文化的領域へ通じることによって、吉田山全体の有機的な連携を生み、景観体験の体系が現れる。

## 7. 結論

吉田山における大規模な景観は、主に周囲の環境とここの宗教・遊興史の上に、意欲的に文化を意図した施主の莫大な富を背景にして造成された遊興文化的領域を重ねて成り立つ。以上の文化的領域は、それぞれに閉じたものではなく、周囲の空間を互いにそれぞれの場所の意味に読み換える「みる・みられる」の関係により合理的に丘陵地を共有している。これらへ至る緑地苑路は、微地形に対する細かな操作の統合の結果、モードの変換装置として働き、全体のランドスケープが現象的に形成されているといえる。

このようにして形作られた、斜面上の微地形を活かして立体的に空間を重ねる構成は、その後ここを利用する人々に、文化的意識を持たせるに至り、諸活動の舞台として活用されるようになった。

<sup>1</sup> 山田圭次郎：地形文脈における敷地マネジメントに関する景観論的研究，京大大学院工学研究科博士論文，2002.3

<sup>2</sup> 中川等：近代京都における住宅の発展に関する考察，京都大学工学部建築学科卒業論文，1980.3/矢ヶ崎善太郎：近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情，日本建築学会計画系論文集 第 507 号，pp.213-219，1998.5 / 中嶋節子：近代京都における市街地近郊山地の「公園」としての位置付けとその整備，日本建築学会計画系論文集 第 496 号，pp.247-254，1997.6 / 山田圭次郎：多層認識モデルによる敷地の研究，土木計画学研究・講演集 No.23(2)，pp.605-608，2000.11 他

<sup>3</sup> 京都市編：京都の歴史 第 7 巻，p342-344，1979.10

<sup>4</sup> 晴翁木村明啓：花洛名勝図会、須原屋茂兵衛、東山 2-49、1862.9

<sup>5</sup> 今日庵：茶道月報大正 15 年 8 月号～昭和 3 年 12 月号、1926-1928